



21世紀の途上国における都市化は目覚ましいものです。世界の約90パーセントの都市成長は途上国で起こっており、2000年から2030年の間に途上国の都市市街地面積は三倍に拡大すると予測されています。この先例のない都市の拡大が起きている今こそが、都市・国家・国際開発機関にとって都市計画を見直すまたとない機会となるでしょう。環境のみならず経済的に持続可能な都市の計画・開発・建設・管理を実施するのにこの好機を逃すことはできません。都市化は速いスピードで進んでいますから、持続可能な都市対策を途上国の各都市に確実に根付かせるためには、限られた時間しかありません。今日私たちが起こす行動が、今日そして未来の世代にとって大きな利益となり得るのです。

この都市化の挑戦に応えるために、世界銀行は“Eco<sup>2</sup>都市：エコロジカルで経済的な都市”という新しいイニシアチブを立ち上げました。途上国の都市が最大限の環境と経済利益を得るための援助をすることが目的です。

#### **エコロジカル (ecological) な都市とは？**

エコロジカルな都市は、環境・生態系から得られる資源を最大限に効率よく利用し、また未来の世代のために生態系を保全します。総合的な都市計画・管理を行うことで、市民と社会に住みよい環境をもたらします。

#### **経済的 (economic) な都市とは？**

経済的な都市は、全ての有形・無形資産を効率よく活用し、また生産効率の高い包括的で持続性のある経済活動を促進することで、市民・ビジネス・社会にビジネスチャンスや雇用機会を提供します。

#### **Eco<sup>2</sup>都市とは？**

文字通り Eco<sup>2</sup>都市はエコロジカルかつ経済的な都市、つまり都市の環境・生態系が経済活動に好影響やビジネスチャンスを与え、逆にその環境・生態系が経済効率の高い方法で保全される、環境と経済が依存しあい相乗効果を生み出す都市のことです。先進国のみならず途上国の革新的な都市では、戦略的アプローチによって現状より少ない量の資源や再生可能資源を利用することで資源利用の経済効率を最大限に高めたり、公害や廃棄物を減らすことに成功しています。市民生活の質は向上し、都市の経済競争力や resilience が向上しました。また都市の財政状況は改善し、都市に根付く「サステイナブルな文化」をもたらしました。さらに、戦略的アプローチは都市の貧困層に大きな恩恵をもたらしているのです。このように持続可能性を高めることは、都市にとって次々とプラス面の波及効果が期待される強力な永続的な投資です。総合的な戦略的アプローチをとる都市は、変化の激しい不確定な経済状況にあってもショックを乗り越え経費を抑え、ビジネスを誘致し繁栄することができるのです。

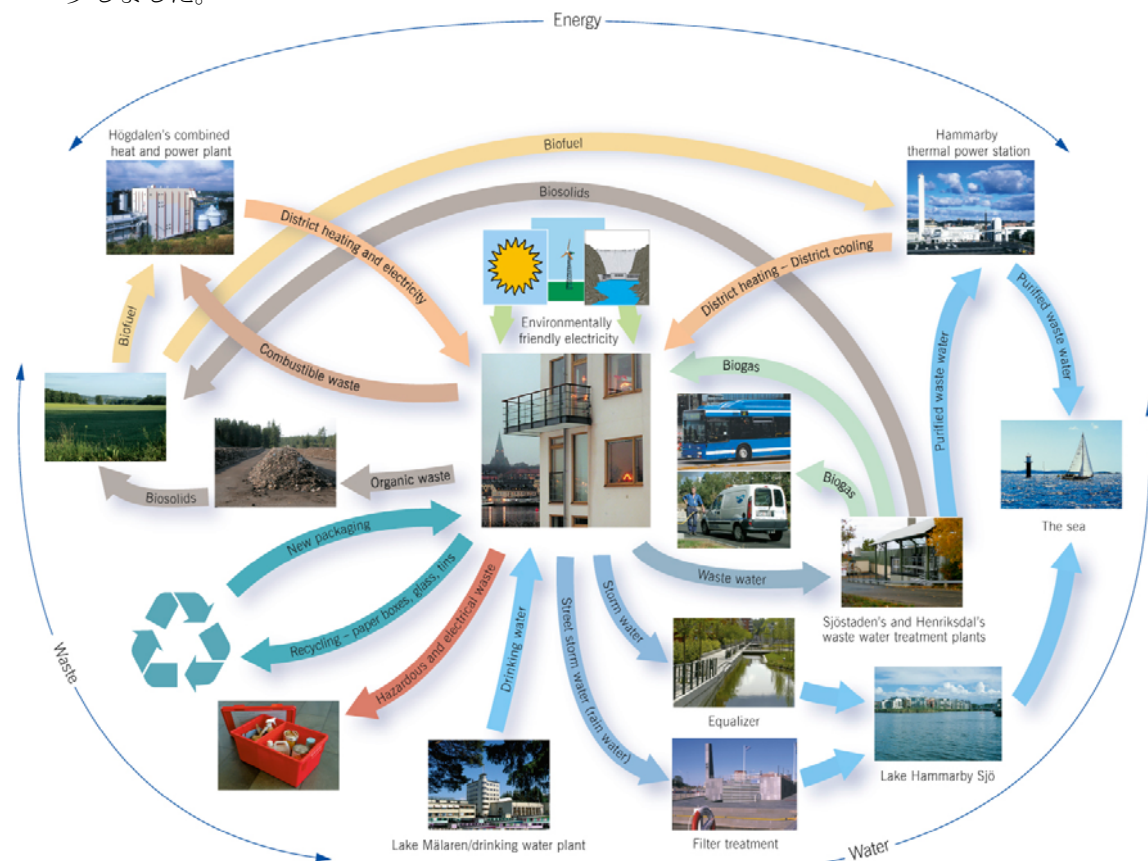
途上国の都市がこのような環境と経済の持続可能性を実現し、さらに持続性のある発展の軌道をたどる可能性がある今だからこそ、Eco<sup>2</sup>都市プログラムが重要なのです。

## Eco<sup>2</sup>都市プログラムの特徴

Eco<sup>2</sup>都市プログラムにはいくつかの特徴があります。まずこれは総合的な都市支援プログラムであり、都市が独自の状況にあわせて利用できる Analytical and Operational Framework を提案します。このフレームワークには、都市が Eco<sup>2</sup> のアプローチを都市計画・開発・管理に適用しやすいように計画手法やツールも含まれています。Eco<sup>2</sup>都市プログラムはさらに、途上国の都市が都市インフラ投資に必要な開発資金にアクセスしやすいように支援をします。

もうひとつの重要な特徴は、Eco<sup>2</sup> はボトムアップ・アプローチであることです。世界の都市の成功事例をみると、どのように彼らが環境と経済の持続性を成功させたかがよく分かります。Eco<sup>2</sup> プログラムは、世界の都市での成功事例を系統的に取り入れています。以下が幾つかの事例です。

- ストックホルム市（スウェーデン）** では、総合的で連携した都市計画・管理を実施し、都市の循環システムを効率よく利用するプログラムを実施しました。市内の荒廃していた工業跡地を再開発し、魅力的で持続的な地区として蘇らせることに成功したのです。この新しい地区（Hammarby Sjostad）はストックホルムの既存市街地ともうまく調和したため、市は新たな同様の都市プログラムを計画しています。プログラム初期段階の測定結果によると、この地区において、再生可能ではないエネルギー使用率が 30 パーセント、水の使用量が 41 パーセント減少しました。



ハマビー・モデル（ストックホルム市）：都市の循環系に基づいた総合的な都市計画・管理の好例。相当な量の資源使用の削減と汚染物質排出の削減に成功しました。  
[http://www.hammarbysjostad.se/frameset.asp?target=inenglish/inenglish\\_model.asp](http://www.hammarbysjostad.se/frameset.asp?target=inenglish/inenglish_model.asp)



ストックホルム市は、便利な公共交通システムと空間計画によって、調和のとれた都市計画がみられる都市です。

- **クリチバ市（ブラジル）** は、革新的で想像力に富んだ実用的な都市計画・開発を実施し、資金が不足している都市は環境に優しくかつ経済的な都市づくりを行うことが難しいという考えを覆しました。それどころか持続可能な都市計画は、都市の将来の経済発展や福祉にとっての投資となっているのです。クリチバ市では、1960年に36.1万人だった人口が2007年には179.7万人に増加しましたが、革新的な都市計画・管理、交通計画を行なったことで人口増加にうまく対応した都市をつくってきました。有名なBRTバス・システムに代表されるように、クリチバ市ではあらゆる都市計画の要素について革新的な解決策を見つけ出してきました。そして何よりも重要なのは、環境・経済の持続可能性につながる活動が都市や市民にとって日常の文化として根付いたことです。ブラジルの主要都市の中でクリチバ市は最も高い公共交通機関利用率（45パーセント）、また最も低い渋滞による経済損失と都市の空気汚染度を達成しています。都市の密度と経済活動を保ちつつ、一方でクリチバ市は環境への投資として広大な公園を作りました。公園の広大な緑地と池は水を吸収するため、市が頭を悩ませていた洪水対策となりました。公園建設は、洪水対策として人工的なコンクリート水路を建設する約5分の1の費用で済みました。さらに公園は市民や旅行者にとって魅力的な場所となり、自転車専用道路や歩行者のための散歩道が街の交通ネットワークと繋がって配置されました。公園周辺の土地の価値もあがりました。貧困層対策は常にクリチバ市の都市プログラムの中核にあり、たとえば低所得者用住宅や零細企業援助プログラムなどが提供されています。革新的なごみ収集・リサイクルのプログラムでは、貧困層は自分たちが集めたごみやリサイクル品をバスのチケットや食べ物と交換することができます。
- **横浜市（日本）** では、総合的な政策と市民や関係者たちの協力によって、17万人の人口増加があった期間に38.7パーセントの廃棄物量削減を達成しました。この相当な量の廃棄物削減

により横浜市は2箇所のごみ焼却炉を閉鎖し、それらの改修に必要とされていた1100億円と年間経費の6億円を節約することに成功しました。

- **バンクーバー市（カナダ）**では、土地利用計画と地元レベルでの都市政策によってとても住みやすい都市をつくり、都市のスプロールを食い止めることに成功しました。バンクーバーの大都市圏域は、同等の人口を有する他の都市圏域と比較するととてもコンパクトにまとまっています。都市中心地域には幹線道路が通過していなくて住みやすいため、多くの人が暮らしています。バンクーバー市は、常に世界で住みやすい都市として最上位にランクされています。

## Eco<sup>2</sup>都市プログラムの内容

世界銀行のEco<sup>2</sup>都市プログラムは、途上国の都市が「環境と経済の持続性」を達成するための実用的かつ実現可能な援助を提供します。Eco<sup>2</sup>都市プログラムでは、世界中のどの都市であっても、各自の持続可能性の目標に向けて取り組むことのできる、Analytical and Operational Framework（Eco<sup>2</sup>フレームワーク）を提供します。

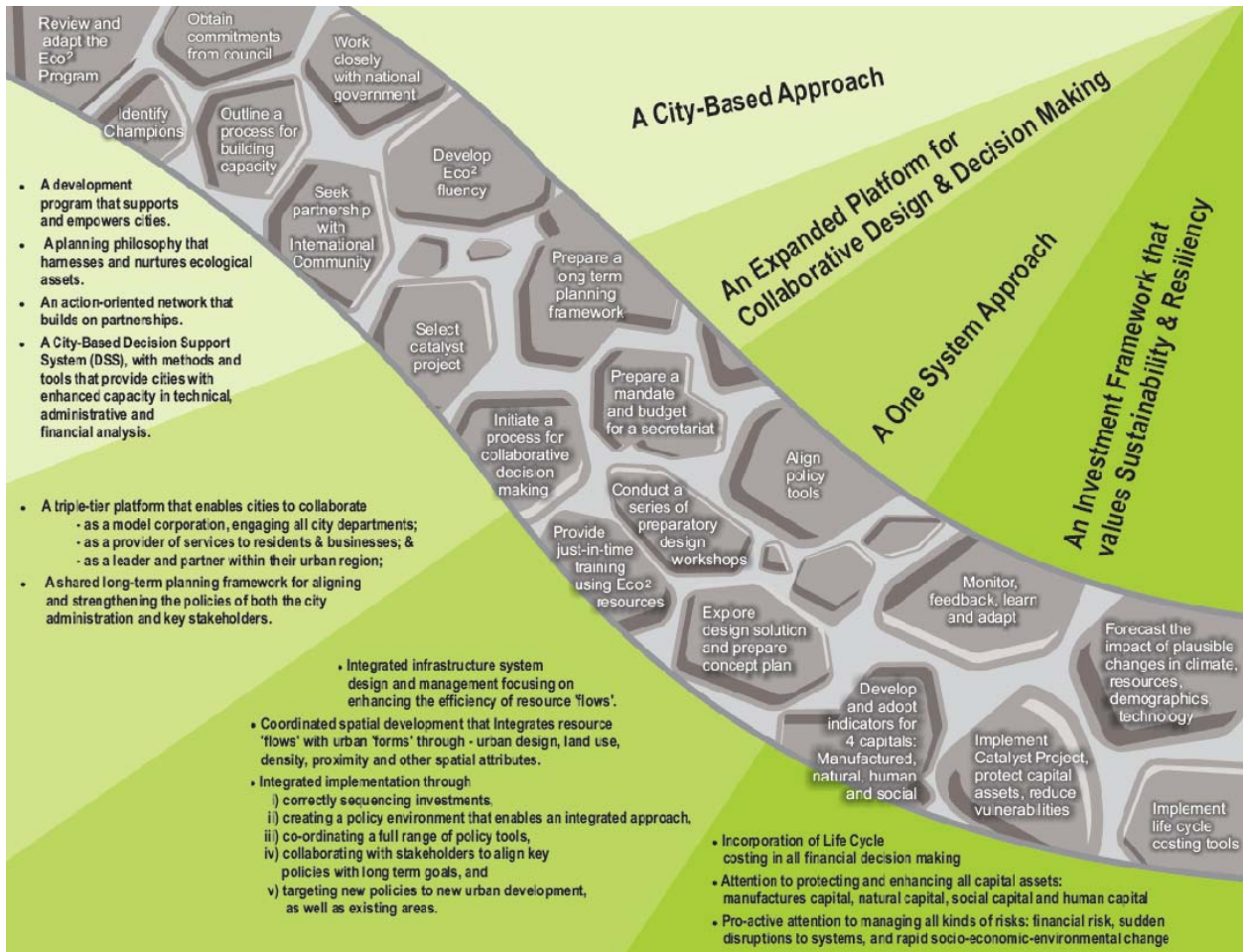
Eco<sup>2</sup>フレームワークは、四つの基本原則に基づいています。都市にとって、新しいアプローチを取ることは困難です。Eco<sup>2</sup>フレームワークでは、都市にとっての戦略的な政策—Eco<sup>2</sup>都市プログラムを形成する基本原則—を設計するにあたり、世界の成功事例や、都市が直面すると考えられる障害となる要素をよく考慮しました。広く適用可能でかつ成功には必要不可欠であるにも関わらず、たびたび見落とされたり価値を認められないこともある都市計画の原則がEco<sup>2</sup>の四つの原則としてまとめられました。

Eco<sup>2</sup>の四つの原則は：1) 市政府が、都市特有の都市や生態系状況を勘案して開発プロセスをすすめることができる「都市ベースのアプローチ」；2) 都市の主要なステークホルダーの活動を統合・調整して、持続性のある相乗作用をうみだす「協同計画・政策決定のための大きな基盤」；3) 都市の全システムをひとつに統合する計画・デザイン・管理をすることで、都市が最大の効果を得ることができる「ワン・システム・アプローチ」；そして4) ライフサイクル分析、資本（物質、自然、人的、社会資本）の価値、政策決定時のリスクアセスメントを組み入れた「都市の持続性とresilienceを評価する投資の枠組」。

四つの原則は互いに関係し影響しあっています。例えば、都市が主導権をもつ強い都市ベースのアプローチなしには、「協同計画・意思決定のための大きな基盤」を通して主要なステークホルダーの関心をひくことはできません。共通基盤なしには、創造性に富んだ都市計画・管理の新しいアプローチを試してみたり、政策を調整してひとつのシステムに統合されたアプローチを実施してみたりすることはできません。都市に対する投資に優先度をつけたり、都市持続性とresilienceへの投資効果をみる際には、都市がワン・システムを採用し、利害関係者が協同して活動できる基盤をもつことが必要です。

これらの四つの原則を通じて、さらに詳しくEco<sup>2</sup>フレームワークを形作るcore elementsがいくつか提案されます。各都市にはこれらのcore elementsに基づいて、かつ都市状況を考慮して論理的な順序をもって具体的な行動策を一步步踏んでいくことが期待されます。この順序だった段階stepping stonesは、都市がEco<sup>2</sup> Pathway（都市特有のEco<sup>2</sup>行動プラン）をつくる道標となります。Eco<sup>2</sup>都市プログラムでは、強力な都市診断ツールや都市成長シナリオ計画などの、効率よく政策決定を下すための計画手法やツールを提供します。これらのツールや手法は、Eco<sup>2</sup>のcore elementsを基にしてstepping stonesの段階を一步步進んでいく際に活用することもできます。

Eco<sup>2</sup>都市とは、Eco<sup>2</sup>の四原則を受け入れ、都市独自の状況においてAnalytical and Operational Frameworkを適応し、独自のEco<sup>2</sup> Pathwayを設計し実施段階にうつす都市のことをいいます。



各 Eco<sup>2</sup> の原則は、さらに core elements に分けることができます (図の左側)。これらの要素は、各都市が独自につくる Eco<sup>2</sup> Pathway のための stepping stones (図の中央) を形作ります。

Eco<sup>2</sup> の各原則をさらに詳しく見ていきます：

**Eco<sup>2</sup> の四原則**

**原則 1 : 都市ベースのアプローチ**

第一の原則は「都市ベースのアプローチ」で、これは二つの補完する意味合いをもっています。ひとつは、都市こそが都市計画の総合的アプローチをとる最適な位置づけにあるということです。都市は経済活動や市民の生活の場であるだけでなく、資源やエネルギー消費、有害物質排出の責任を負う立場でもあります。都市レベルでこそ地元特有の土地情報を統合したり、Eco<sup>2</sup> Pathway の成果を左右するステークホルダーたちと迅速かつ綿密に計画をすすめたりすることが可能なのです。また都市計画の実施が成功した場合、都市自体が利益を得ることができるのです。さらに、財政・行政の地方分権化により地方自治体・市政府に政策決定や都市管理が任されるようになりました。いま都市は前向きにリーダーシップをとり、改革を始めるきっかけを与えられているのです。

ふたつ目は、都市ベースのアプローチはその土地の特徴、特に生態系システム、を考慮することを重要とみています。よって都市ベースアプローチは地元の環境のプラスとマイナス面を考慮しています。新しい開発は地形の特性をいかすことができるかどうかー水は重力により下流に供給され、排水は自然に任せることができるのかどうか（高価なインフラ投資や設備運用費を削減する）；都市はどのようにして水資源や湿地帯を保全して水の供給力や水質を維持することができるか；どのように都市をデザインし人口を都市内に配分すれば、風力・太陽熱などの再生可能エネルギーを充分供給することができるかどうか；などの要素を考慮する必要があります。都市計画の専門家にとって、都市を景観や周辺環境に溶け込ませ、自然資本を尊重し、生態系が今日そして未来の世代に残されるように考慮した都市デザインを実施することは、とてもやりがいのあるチャレンジとなるでしょう。

都市ベースのアプローチは、都市のリーダーシップ、現地の生態系、そしてあらゆる都市の状況を考慮するため、とても具体的です。よってEco<sup>2</sup>フレームワークをその都市特有の状況に置き換えて再検討することが、各都市にとっての初めの足がかり stepping stone になるでしょう。

## 原則2：協同計画・政策決定のための大きな基盤

都市において、インフラの管理責任は細分化されてきています。インフラの管理管轄が重複してしまうこともありますし、主要なインフラが民間の手によって管理されることも多くなってきました。急速な都市化の時代において、都市が率先して都市開発のプロセスを整理し、管理していくことが重要になってきています。

都市は協同的な都市計画・管理プロセスを、三段階に分けたプラットフォームに基づいて実施することができます。

第一段階では、都市プロジェクトは市政府の内部で実施・管理されます。例えば、市が所有する全施設のエネルギー効率を改善する、市職員の自動車利用シェアリングを推進する、職員の勤務時間をずらすことでエネルギーや交通渋滞の最大負荷を緩和する、などの対策をとることです。

第二段階では、都市は都市計画・監督業務・政策決定などをふくめた都市サービス提供者として都市プロジェクトに関わります。上水の供給、土地利用計画、交通計画などの都市サービスです。この段階では、都市プロジェクトの成果を左右する都市のステークホルダー（民間・市民を含む）との協同が必要となります。

第三段階では、全都市域・大都市圏レベルでの協同が必要となります。新しい土地の開発や大都市圏の管理などの課題に取り組む際に、上位政府や重要な民間企業のパートナーや市民社会と協同してプロジェクトの計画・政策決定をする必要があるからです。

協同のための三段階プラットフォームの重要なポイントは、長期の都市計画フレームワークが都市政府と主要ステークホルダーにとって共有できる整合性のとれたものであり、将来のEco<sup>2</sup>プロジェクトに繋げることができるということです。三段階の協同体制により、都市に関わるすべての関係者を巻き込んで同じ目標に進むことを可能にします。

### 三段階のプラットフォーム



三段階プラットフォームでは、都市があらゆる段階においてステークホルダーと関わることを可能にしています。第一段階（図の円の中心）では、協同体制は市政府の内部で行われます。各部署が連携して持続可能な活動を実施します。第二段階（円の中層）では、都市のステークホルダー間の連携や協同によって、都市サービスの持続可能性が改善・向上します。第三段階（円の外層）では、持続可能な大都市圏の開発に関わる主要な関係者たちを多くまきこんだ協同・連携が行われます。

**原則3：ワン・システム・アプローチ**

ワン・システム・アプローチは、都市と都市環境をひとつの完全な総合的システム（ワン・システム）とみなして、最大限の利益を得ようとするものです。都市と都市環境をワン・システムと見ることによって、都市の各機能が効率よく機能するように計画がしやすくなります。ひとつの総合的なインフラ設備を設計・管理することで、都市内の資源の流れを効率よく改善することができます。例えば、エネルギーや水を段階的に利用することで（looping や cascading などの方法によって）、同量の資源量からより多くの需要を満たすことが可能となるのです。

またワン・システム・アプローチでは、都市の空間計画（土地利用・都市デザイン・密度計画等）とインフラシステム計画を組み合わせることで、都市のフォーム（形状）と資源のフロー（流れ）を同時に捉えるようにします。例えば、新しい都市開発は上水・エネルギー・交通体系の整った地域に位置するようにすると、既存のインフラを活用することができます。都市の形状や空間計画は、都市施設の位置・集中度・配分・需要の有無などによって、インフラシステムのネットワーク計画に多大な影響を与えます。都市形状は、インフラのデザイン・許容量・技術の選択・採算のとれるオプションの選択などにおいて、物理的にも経済的にもインフラのシステムに大きく影響を与えるのです。そして資源利用の効率性も大きく変わってきます。

どの都市にとっても、都市のフォームとフローをうまく組み合わせることはとても重要で、都市プロジェクトを成功させるための重要な鍵です。ワン・システム・アプローチでは、総合的な方法によってどのようにプロジェクトを実施するかということにも焦点をあてています。順序だった投資を進めることで、都市は長期的で分野横断的な課題に対して正しい基礎を敷くことができます。また、総合的な都市計画のアプローチをとれるような政策環境を作り出すことも必要です。さまざまな政策ツールを調整して活用したり、主要政策についてステークホルダーの同意をとったり、新市街地の開発と既存市街地の改善という異なる状況における都市政策を策定したりすることが必要だからです。

セクター内のみならずセクター間で、政策実施・ステークホルダーとの連携・資金調達メカニズムの順序付けなどの連携・統合が可能です。これによって最大限の効率・相乗効果・投資効果が期待されるとともに、環境・経済の状況も向上すると考えられます。

ワン・システム・アプローチによって、都市とその周辺の自然地域や郊外地域は、一体となって機能的な都市システムをつくることができます。

#### 原則4：都市の持続性と resilience を評価する投資枠組

都市の持続性や resilience を向上させるために投資を行うということは、単純に見えてもとても実施が難しいものです。政策・計画・プロジェクトは短期の財務利益をもとに評価されがちです。単一の関係者やプロジェクトのゴールからみた狭い視点の費用便益分析に基づいた評価をされることも多いのです。投資は貨幣価値で評価され、貨幣価値に換算できない要素は無視されるか、外部要素として扱われることが多いのです。90パーセント以上のインフラのライフサイクルコストは、インフラの運用・維持管理・修理などの段階に費やされるにも関わらず、政策決定は直近の資本コストに基づいてなされることがほとんどです。

長期的な視点で新しい開発の財政状況を分析して理解しているのは、世界でもほんの数少ない都市のみです。ライフサイクル費用は多くの場合後回しで考えられるため、その結果、未来の世代がインフラ維持のための多大な財政責任（修理・交換費用など）を負うことになってしまいます。

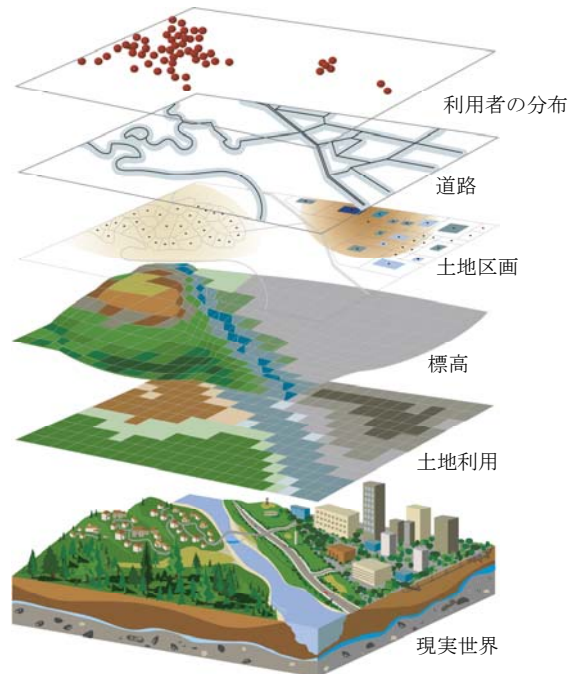
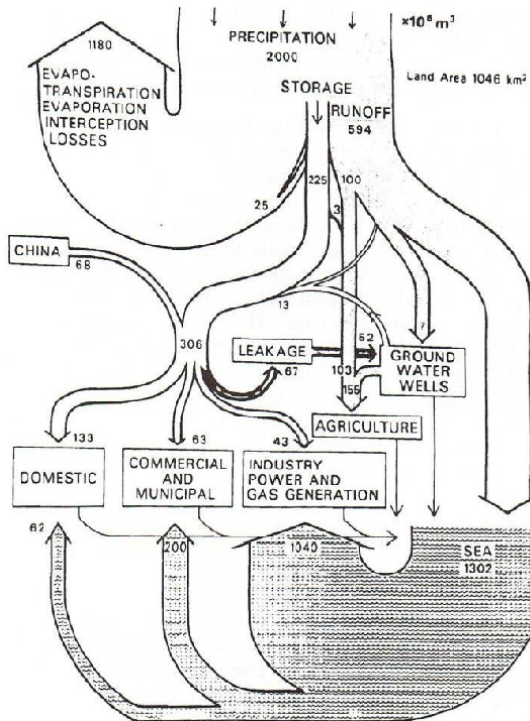
それと同時に、環境・生態系から市民が受ける恩恵、環境を破壊することによる経済的・社会的損失などは、政府の財政には通常反映されない要素です。これらの自然財産は定量化されないため、価値がないものとして扱われてしまい、環境から市民が受ける恩恵は全く考慮されません。Eco<sup>2</sup>の四つ目の原則では、都市が政策や投資の決定を下すにあたり、新しいフレームワークを作ることを提案しています。

フレームワークには幾つかの要素があります。都市の全てのステークホルダーの活動を評価するための、新しい指標やベンチマークが必要です。指標は異なる分野の政策決定者に応じて選定される必要があります（例えば、戦略の評価とプロジェクトの運用とは異なる指標が必要）。長期的な視点が必要で、政策や投資オプションの影響を調べるためにはライフサイクル分析を行う必要があります。四つの資本（物質、自然、人的、社会資本）とそれらが提供するサービスは、適正に評価され、指標をつかってモニターされなくてはなりません。全指標をまとめて成果を評価することも必要で、そうすることで定量化されない都市の側面（文化・歴史・景観など）も、投資の費用便益をする際に考慮することができます。

また同時に、都市の持続性と resilience に投資をすることは、投資の際のリスク・アセスメントの範疇を広げることになります。なぜなら都市には、投資のみならず都市自体の継続性を脅かすような、間接的で定量化されないリスクが潜んでいるからです。



Eco<sup>2</sup> 方法論：資源の Flow と都市の Form を合成して考えることで、分野やセクターにとらわれない都市計画の基盤をつくりだします



資源の Flow: マテリアルフロー分析とサンキー図

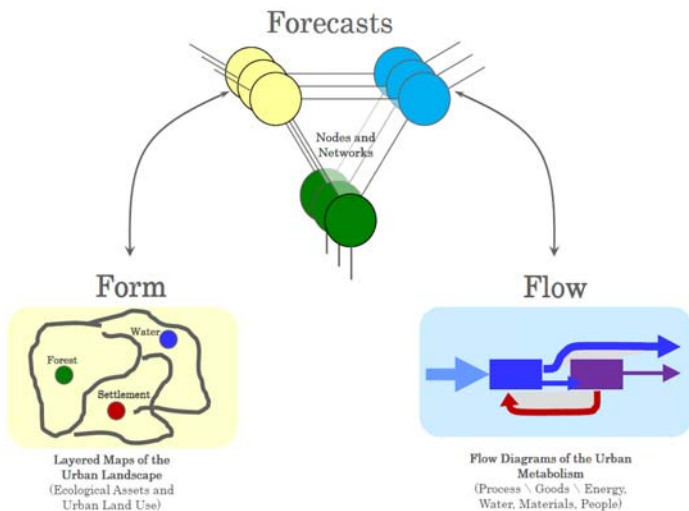
いかなる大きさの都市であっても、都市内での資源や物資の動きを計算して図式化することができます。資源の投入量とそれからの最終的なアウトプット量は、自然から取り出した資源量、設備による処理、家庭や事業における資源の消費、資源使用後の処理、そして再生利用もしくは廃棄物として自然に戻すための処理過程などから決定されます。サンキー図は見やすくシンプルなため、資源の流れや資源が効率よく使われているかどうかなどを簡単に一目で理解することができます。

都市の Form: 情報を載せた地図を重ねる (レイヤリング)

多数の関係者と協同して都市計画を進めるにあたり、地図はとても有効なツールです。文章よりも図のほうが視覚に訴えて理解をしやすいことがあるからです。情報を載せた各地図は、都市のさまざまな特性を示すレイヤー(層)と捉えることができ、レイヤーを重ねることで都市空間において各特性がどのように関係しあっているかを即時に見取り、定量化することができます。コンピュータ技術と衛星写真技術の進歩によって、レイヤリングは都市計画の重要な手段となっています。

資源 Flow と都市 Form の合成：分野やセクターにとらわれない都市計画の基盤

図や地図は簡単に理解することができるため、都市計画家や政策決定者がステークホルダーや各分野の専門家たちとともに統合的な都市計画を策定するための共通の土台として使うことができます。資源の流れと形状両方ともに、現状と将来のシナリオに基づいて分析が必要です。このマテリアルフロー分析とレイヤリングを組み合わせることで、「分野やセクターにとらわれない」都市計画の基盤をつくることができます。都市の空間構造と資源の流れは、相互依存しているものの、全く異なる分析方法や利害関係者が関わっているために、総合的に捉えるのが難しいのです。分野やセクターにとらわれない都市計画の基盤によって、「ワン・システム・アプローチ」が可能になります。



## Eco<sup>2</sup> Catalyst Project を使った漸進的で段階に分けたアプローチ

全てのEco<sup>2</sup>の core elements を同時に取り入れて都市計画をすすめるのは、都市にとっては難しいことです。多くの都市は、少しずつ段階的なアプローチをとることが必要でしょう。都市はまず都市の管理能力の向上（キャパシティ・ビルディング）に取り組みます。そして都市のもっとも重要な課題に取り組むためにEco<sup>2</sup> Catalyst Project を計画・実施します。Eco<sup>2</sup> Pathway は、状況に応じて絶えず改善や内容の変換が必要であるため、漸進的で段階的に進めると対応がしやすいと考えられます。まず最初のステップは、都市のもっとも重要課題に対応するEco<sup>2</sup> Catalyst Project を選定することです。そしてこのプロジェクトを元にキャパシティ・ビルディングに取り組むのです。資源の効率利用のための独立したプロジェクトを立ち上げるのとは異なり、Eco<sup>2</sup> Catalyst Project は都市をEco<sup>2</sup> Pathway に導くための重要な鍵となるのです。Eco<sup>2</sup> Pathway は、各都市の優先事項や能力によってそれぞれ設計されます。

## 次のステップに向けて

都市では不確かな状況から希望が生まれたり、困難だった課題が都市問題の解決策になったりします。

Eco<sup>2</sup>プログラムでは、途上国の都市が最大限の環境・経済持続性を実現するための基盤を提供します。世界銀行は途上国の各都市政府、国家政府、世界の成功事例都市、多国間・二国間開発期間、研究機関、民間企業、NGOなどと連携してこのプログラムを進めていく予定です。途上国のEco<sup>2</sup>試験（パイロット）都市においてその都市独自のEco<sup>2</sup> Pathway をつくっていくと同時に、そのパイロット都市の経験をEco<sup>2</sup> Pathway に取り組む別の都市に伝える、都市間の連携を推進したいと考えています。世界の成功事例として紹介したいいくつかの都市や開発機関が、Eco<sup>2</sup>都市プログラムに興味を示し、協力を示してくれたことにたいへん嬉しく思っています。Eco<sup>2</sup>都市プログラムは、さらに世界中からの専門知識や成功例を取り入れ、進化・改善していきます。このEco<sup>2</sup>プログラムは世界各地の異なる都市環境に順応していくプログラムです。いまこそがEco<sup>2</sup>都市プログラムについて考え、どのようにプログラムを組み立てていくかを考える好機なのです。



都市では不確かな状況から希望が生まれたり、困難だった課題が都市問題の解決策になったりします。ブラジルのクリチバ市では、環境エンジニアリングに基づき自然を保全し公園を建設したことにより、長年悩まされてきた洪水への対策をとることに成功しました。廃棄物管理においては、「ごみではないごみプログラム」（リサイクルプログラム）などの革新的なプログラムを通じて、市民の環境意識を高めることに成功しました。（Picture from IPPUC, Curitiba）

## 協力体制

世界銀行は、オーストラリア政府 AusAID から Eco<sup>2</sup>プログラムの資金提供のみならず、プログラムへの評価やコメント等の協力を得ました。また、ESMAP (Energy Sector Management Assistance Program) からは 資金と技術的協力を受けています。スウェーデン政府 SIDA からは、さらなる Eco<sup>2</sup>プログラムの開発にむけて知識の提供を受けています。

## Eco<sup>2</sup>都市プログラムの出版物

世界銀行から “Eco<sup>2</sup> Cities: Ecological Cities as Economic Cities,” という題名の三部構成の本が出版されています (会議版)。本の第一部では Eco<sup>2</sup>の原則と core elements を紹介し、都市はどのようにこれらの要素をもとに段階的な Eco<sup>2</sup> Pathway を計画していくことができるかを説明しています。第二部では、都市が総合的な都市計画を進めるにあたって活用することができる手法やツールを紹介しています。第三部では、世界の都市の成功事例や、セクター別の都市計画・政策オプションを紹介しています。本で紹介できなかった都市計画の手法・ツールや世界の都市の成功事例は、世界銀行の Eco<sup>2</sup>プログラムのウェブサイト [www.worldbank.org/eco2](http://www.worldbank.org/eco2) に掲載の予定です。本の会議版はシティネット横浜大会の会場で配布するほか (限定数)、上記 Eco<sup>2</sup>のウェブサイトから PDF 形式でダウンロードすることができます。

プログラムの詳細については下記にお問い合わせください：

- Hiroaki Suzuki 鈴木博明,  
Urban Sector Leader, Team Leader, Eco<sup>2</sup> Cities Program, [hsuzuki@worldbank.org](mailto:hsuzuki@worldbank.org)
- Arish Dastur,  
Urban Specialist, Co-Team Leader, Eco<sup>2</sup> Cities Program [adastur@worldbank.org](mailto:adastur@worldbank.org)



THE WORLD BANK



Australian Government  
AusAID